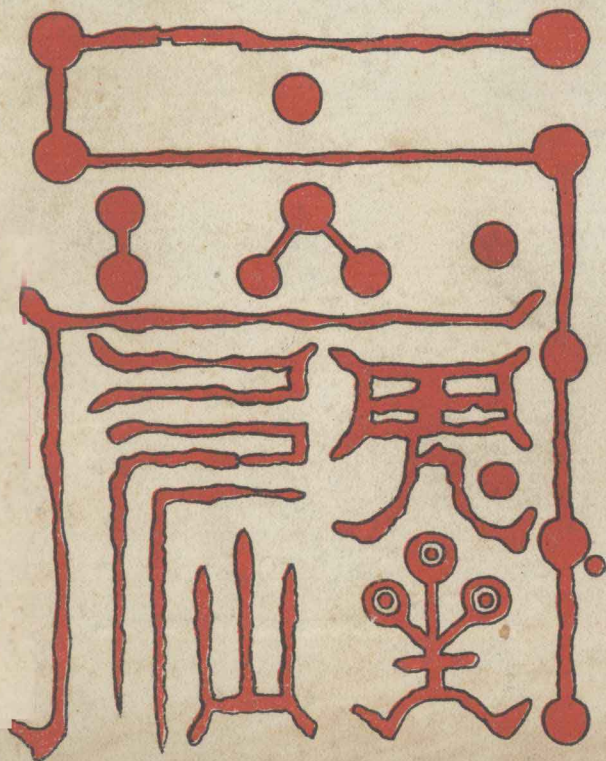


星まんだら

野尻抱影 著



野尻抱影著

岩手人だん

京都印書館

著作者略歴

早大英文科出身。早大講師。

主要著述

星座巡禮（研究社）

星戀（鎌倉書房）

他に譯業、星に關する著書多し。

昭和二十四年七月五日 印刷
昭和二十四年七月十日 發行

星まんだら

定價 百八拾圓

著作者 野尻抱影

發行省 清水正光

印刷者 中越印刷株式會社
伊藤・藤・祐・二

發行所 京都印書館

京都市中京區押小路通柳屋町東

(A111071) 電話上3)4199番

次

惡星退散……………	(一)
初對面……………	(一〇)
龍涎香記……………	(一五)
逢魔が時……………	(二九)
むじな話……………	(三)
土星を笑ふ……………	(四二)
信西入道……………	(四八)
望遠鏡受難……………	(五六)
濱芝居……………	(七一)
「天鼓」と星……………	(七九)
ナロー・エスケープ……………	(九二)
銀紙の星……………	(一〇七)

美	談		(一〇八)
星 光・月 光		(一一三)	
星を食つた話		(一二九)	
愛 宕 山		(一三六)	
白 藏 主		(一四〇)	
入定星探訪		(一三九)	
金 銀 の 鼻		(一五二)	
伊丹万作君		(一五八)	
ぼろ市・嫁市		(一六六)	
たづぬるかた		(一七六)	
梅花明似星		(一八五)	
月がふえる話		(一九二)	
俳諧武玉川の星		(二〇三)	
あとがき		(二一一)	

悪星退散

その棟梁は今年八十三になる。父の代からの出入りだが、今はわたしの茶飲み友達で、來るとなると三日にあげずやつて來て、わたしのペンを休めさせ、尋ねるままに、いろいろ昔話をしてくれる。近くの府中の生まれで、子供の時は、もう「ハゲチャビン」だつた小金井小次郎におぶさつて、赤熊頭しやぐまの官軍の道中を見たり、うこんの袋に入れた刀を肩に、小次郎を訪ねて來た次郎長に頭を撫でられたりした相で「わしの顔は小次郎親分そつくりだてえことです」と酒やけのしたてらてら光りの、盤廣ろな顔を正面に向ける。こんな顔なら小次郎も印象は好人物だつたにちがひない。「手慰みは決してやるなよ」と戒められたと言ふ。

「榎本ブーさんの文身を知つてゐるのも、わしだけでせう。内の人だつて見た者はねえといふんですが、湯殿を直しに行つてたので見ちまつた。腕はボカシ彫で、背中のまん中に、ウハバミか何か、でかいものの首が見えてました。なんでも、あの旦那はやくざの上がりでせう

ね」と言つて、わたしを微笑させる。

さうかと思ふと、「上州へ行つたとき、國定忠次のはりつけ柱がくまつて、まだボサ藪の中に轉げてたのを見ましたよ。ああいふ柱の横木には、栗の木を使つたもんでゴージ（業木？）と言ひました。だからわしら若い時には、そいつはゴージだなんて言はうものなら、目の玉とび出るほど、シツちかられたもんでさ。」と言つたり、

「八王子ではもと六齋の日に市が立つたので、『今度また市で會はう』といふのを詰めて『コンダイチ』と言つて、それが、なみの『サイナラ』の代りにも使はれたもんです」などと、方言の話もしてくれる。これは、いつか、早稲田で金田一氏に話したら、面白がつてをられた。

こんな風で、わたしはいつもこの老棟梁が茶を飲みに来るのを歓迎してゐる。尤も半月、一と月と來ないことがある。そういう時は、「お山の先生」のところへ行つてゐる。これは川向ふの眞言の寺の住職で、星祭りをやる寺なので「星の先生」とも呼んでゐる。そして、わたしがまた街の天文家なので、この老人をリンクとして、わたしたちは互ひに好感を持つてをり、せがれが學徒で應召したり、油畫をやつていた娘が重態になつたりした時には、お山の先生は、

頼まないでも親切に護摩を焚いたり、おれを屈けてくれたりした。しかし、京都の本山とかけ持ちなので、留守が多く、老人はふたりの「先生」を引き會はせようと熱望してゐるのだが、今以てその機會がない。

年末の夜の星祭にも、お山からわたしを招いてくれるのだが、いつも行きそびれてゐる。そんな時に齋戒沐浴して護摩木を焚くのは棟梁の役目だといふ。そのくらゐだから、いつぱしの行法も授けられてゐて、その氣になれば、どこかの寺になほる資格もあるのだが、それは、同じ弟子すぢの近所の左官に譲つた。

これも人の好い、仕事も親切な職人で、老人の肝煎りもあつて、權少僧都とかを授かり、地方の寺の住職に收まつたが、附いてゐる田畑が少いので當節では食べて行けない。それで時々戻つて來ては、手についた仕事をやつてゐる。いつか權少僧都になつた記念に、すつかり頭を剃り法衣をつけ、棟梁は袈裟をかけて後ろに立ち、兩人チンと澄ました顔で撮つた寫眞を見せてくれたが、どうして、堂に入つたもので、かりそめにも「こんにやく問答」の六兵衛さんなどと失禮なことは言へなかつた。

棟梁は、盆や、彼岸や、わたしの忘れてゐる娘の命日にも、きちんきちんと袈裟をかけてや

つて来る。經^レ上げ、袖の中で指をモゾモゾさせて印を結び、終りに九字を切り、エイオツ！と大喝する。昔近藤勇の「舍弟」を師匠として覺えた劍術の氣合ひも入っているのだらう、初めの時には、家の者が跳び上がった。

年末には床の間と神棚の飾りに來てくれる。何しろ前の年に上げてくれた櫛もそのままでカラカラに反り返り、お神酒徳利も埃りがうづ高いので、今日あたりおじいさんが來ますよと注意されると、主人公あわてて、面目上、櫛を捨て、徳利だけはすすいで置く。そこへ老人、羽織袴に改まつて（大兵なので立派である。）やつて來て、煤を拂ひ、注連飾りをし、お燈明をあかあかと上げて、九字を切り、エイオツと廊下の壁にこだまを返してから歸つて行く。元日も早々とやつて來て、エイオツである。近年はこの聲を聞かないと、大晦日も、正月も來たようないない。

ところで、棟梁は、生き靈と死靈の存在を斷然信じてゐる。この間も、かう説明してくれた。「生き靈なら、肩と背中とのまん中へんがムズムズして、虫かなんかが這つてるような氣がします。死靈の方は足がムズムズして、けつたるくなるから、すぐ判りますのさ。」

わしら、かうして生きてたつて、人間には、タマセエといふもンは、あるらしいんですね。

せんだつて、お山のご新造がわざわざ電車に乗つてコワメシを持つて来て下すつたんで、なぜですかと聞いたたら、中座（靈媒）をやんなさる娘さんに、わしが取ツついて、ひどく腹をすかしてることが判つたもんで、こせえて届けに來たと言つてました。ところが、その後で、死んだ女房のやつがわしの眞似をして出たんで、亭主にばかり食べさせたのを恨んでると判つて、スシをこせえて供養して下すつたさうですよ。あらたかなもんでござんすね。」

わたしも、あらたかなのに感心し、わたしの生き靈もどこかの友だちをムツムズさせて、あいつサントリーに飢えてゐるらしいと、届けてくれるといいなと思つた。近ごろ亡くなつた友人は終戦直後、ウナデンでわたしを飛んで行かせて、「だから、ウナドンだ」と振舞つてくれたことがある。聞きそこねたが、やつぱりムツムズだつたかも知れない。

閑話休題。そこで棟梁に、わたしもこんな話をした。――

「ずつと前のことだが、親類の學生が亡くなる數日前、僕が死んだらその晩、お宅の二階に出るから待つてゐて下さい……正八時にしませうと時刻まで決められ、その頃わたしは、さういふ研究に興味を持つてゐたので、學生の枕もとで話してゐる間に、そんな約束までさせられた

わけなんです。

いよいよ危篤だといふ報らせで一たん別れに駆けつけてから、家へ歸つて、その晩約束の刻限に二階に上がり、電燈を消して暗い中に坐りこんだ、下の茶の間で八時を打つのを待ちながら。……やがて打つた。今こそと、からだを眼にして、まつ暗な中を睨んでゐた。……」

「出ましたらう？」

「出ないね。いつも約束はちゃんと守る學生なんだから、出ないわけはないんだが……それにあんたが建ててから間もない、木の香もする二階だつたし、好きな青年に逢ふんだから陰氣なことはちつともなしさ。ただ死顔がひどく悪かつたので、あのままでバアとやられるのは、少し困ると思つたが。……三十分ほどガン張つたが、とうとう出てくれなかつた。」

「たしかに出るには出てたんですよ。旦那にそれをめつける力がなかつたんですよ。」

「なるほどね」と、わたしは應じて、昔讀んだフランマリオンの本に、人によつて靈感の能力の皆無な者があるとあつたのを思ひ出した。

二三年前のことだが、この棟梁、久しい間腰痛に悩んで、外へ出るにも竹の長い杖をついて、フラフラ歩いてゐた。それが或る日、杖もつかずに、シャンとした腰つきでやつて來て、

こんな話をした。

あんまり切ないので、お山の娘さんを中座に頼んだところが、吉兵衛とか吉右衛門とかいふのが現れて、棟梁の腰にぶら下がつてゐることが判つた。

「腰ですから死霊ですね。そんな名のやつに知り合ひはねえんですが、でもよく考えてみたら、ずつと昔、吉ナンとかいふやつが、しばらくわしんとこでムダ飯を食つてたことがありました。ハバア、あいつめ、どこかで亡くなつて、餓鬼になつて腰にぶら下がつて、一年足らずもわしを悩ましてるんだな、ふてい奴だと思つたんですが、ホトケにやかなひませんでね。

そこで先生に伺ふと、お前の家の辰巳に門か木戸があるだらう。吉兵衛はそこから出入りしては、お前にぶら下がつて、ねだつてゐるのだとおつしやる。木戸なんかごせんせん。もつとも、垣根がところこはれてゐて、のら犬が出入りしているところがあります。……そこだ、そこに違ひない。そこで施餓鬼をしてやんなさい。」

かういふわけで、棟梁は早速その垣根の穴の前に握り飯を供へ、線香を焚き、いとねんごろに供養をし、目には見えねど吉兵衛に説法して、むろん九字を切り、エイオツをやつた。それで忽ち死霊退散、「もう枕なしで、お茶をよばれにめえられるやうになりました。あらたかな

もンでござんす。」

——かういふ話だつた。

また、その後こんな話もあつた。その頃、棟梁の家内に病人が絶えないので、お山にお伺ひを立てたところ、忽ち倅の先妻の祟りと判明した。

この女房が亡くなつた後、倅はその後釜にコブ附きの商賣女を入れようとしたので、老人狼狽して遠縁の女を強引に後に据ゑた。それがうまく行つて一時波風も立たずゐたところ、まづ嫁がわづらふ、婆さまが寝つく、孫たちが熱を出すといふわけだつたのである。

それが前の嫁の祟りと判ると、老人善は急げで——ザンザン降りの午後だつたが、倅、今度の嫁、婆あさま、孫たち、一家残らずを引率して、遠くない寺の墓地まで出かけた。そして、傘をさした足駄の一行横隊の前に立つて、濡れそぼつ墓に向ひ、懇々と心得ちがひを諭して聞かせ、天もひびけとエイオツをやつた。その結果「あらたかなもンでござんす」事もなく死靈退散に及び、病人たちもケロリと平癒したといふのである。

さて近ごろわたくしが外出先から歸つてみると、玄關の上に「悪星退散、善星皆來」といふ四角いお札が貼つてあり、裏の入口にもまた勝手口にもベタベタ貼つてあるのを發見した。むろ

ん棟梁が星祭にお山からいただいて来てくれたものにちがひない。街の天文家には似合はしい風景だと思ひ、微笑して、そのままにしてある。

ところが、客や雑誌社の人たちが自然出入り毎にそれに目をとめる。そして中には「やはりああいふことをお信じになるので」と訊く人もある。わたしは笑つて答へないのだが、時には、説明してから、生き霊は肩がムズムズし、死霊は腰がムズムズするものであると請賣りして聞かせることもある。

さういふ中の一人が言つた。――

「夜、梯子をかけて、あのお札を剝がすんですね。すると遠くからカランコロ、カランコロと下駄の音が聞えて、やがて、髹藏さふんと細い聲がしますよ。」

初 對 面

たしか十五年の秋だつた。アンドロメダの星雲がもう東北に高かつたから十月に入つてゐただらう。よく晴れた星月夜で、久留まりで庭に望遠鏡を立てて、子供たちと星を覗いてゐた。ところへ、木立で暗い門の方から近くの中村白葉君が聲をかけて、はいつて來た。夕方、往來で會つた時に「今夜、望遠鏡を出しますから」と言つておいたからだ。

すると白葉君につづいて數人の人影がはいつて來て、中に懷中電燈の灯が動いてゐた。庭を圍む樹影が濃く、星明りだけでは、顔はまつたく判らない。

白葉君はすぐと、「志賀さんです。星を見たいと仰しやるので……ほかは、お子さんたちです」と紹介した。わたしは思はぬ喜びと共に少し狼狽しながら、暗い中でお互ひに見えない顔どうし、初めての挨拶を交はした。

狼狽したといふのは、大家が親しく謂ゆる駕を枉げられたといふ古風な感情からではない。

そこは文學にたづさはる者の氣安さがあるのだが、志賀さんがつい近くに居を構へられたと知つてからもう半年ほどになり、その間白葉君に誘はれたこともあつたが、自分は文學出でも横道を歩いてゐる人間なのと、漫然と出かけて未見の大家や先輩を煩はすといふ氣になれない性分なので、ついその時までしりごみしてゐた、けれどかうしてあちらから、無造作に見えたとなると、さすが恐縮せずにはゐられなかつたのだ。

しかし、すぐ喜びの方がわたしを占めた。恐らく望遠鏡で星を見られるのはこれが初めてだらう。この『暗夜行路』の作家が星をどう感じられるか、どんな言葉を發せられるか、正直その好奇心がおさへられなかつた。

望遠鏡は、庭の主になつてゐるイトヒバのまつ黒な大木の前で、今西北の空に柄を立ててゐる北斗の二重星に向いてゐた。わたしはいつものやうに、その星（ミザール）にくつついてゐる小さい星（アルコル）を指さしておき、望遠鏡ではそれがずつと離れ、主星が、現はれた別の星と、二つのサファイヤのやうに並んで輝くのをお見せした。

志賀さんが先づ床凡にかけ、長身をかがめて覗いて、「なるほど、これはきれいだ」と呟かれた。

この一語もわたしは聞きのがさなかつた。といふわけは、形容詞に潔癖なこの作家はベンの上ではよくよくでないと「美しい」と書かれることはない。わたしは或る時、志賀さんの作品集から「美しい」といふ字を捜し出してみたことがある。また、その後になつても「美しい」とか「きれい」とか言はれた時の話は覚えてゐる。その中で二回とも言はれたのは、直江津から伏木まで行く船の中で、劔岳の後ろから明けて來た曙光を見た時の話で、『豊年蟲』には恰も金粉を吹き出すやうで、後年、傳源信の「山越彌陀」を見た時にもその曙光を憶ひ出し、感心もしたが物足らぬ感もしたほどだつたと書いてをられる。但し文には「美しかつた」とはない。

考へてみれば可笑な詮索で、また濟まないことだが、わたしはその夜、こんな一言半句にまで、聴き耳を敬てゐたのだ。

さて次ぎに志賀さんは、小さいお嬢さんと代つてうしろに立ち「見てゐるのはあゝ星だよ。目で見ると、小さい星がそばにくつついてゐるだらう。それで見ると、ずつと下の方に光つてゐるのがあの小さい星で、大きな星のそばに別の星が光つてゐる。見えるだらう」といふ意味のことを言はれた。

これは、わたしが今しがた言つたことの殆んど復誦だつた。志賀さんがお嬢さんにそれを繰